

平成 23 年度

# 長畠遺跡 地元説明会資料

一犬上郡甲良町尼子 古河 A S 株式会社構内一

平成 23 年度 8 月 27 日 (土)



第 2 調査区 穫穴住居 SH23 カマドと煙道

調査主体：甲良町教育委員会  
調査機関：財団法人滋賀県文化財保護協会

## 1.はじめに

当協会では、古河 A S 株式会社および甲良町教育委員会からのご依頼を受け、平成 23 年 4 月より長畠（ながばたけ）遺跡の発掘調査を実施しています。このたび、調査が終了しましたので、その成果をご説明いたします。

長畠遺跡は、昭和 58 年（1983 年）に現工場建設計画の時に事前の試掘調査で発見された遺跡です。今回と同様に皆様方のご理解・ご協力を得て、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会が約 6,000 m<sup>2</sup>について発掘調査（以下、「前回の調査」と省略）を実施しました（図 1～3）。その結果、奈良時代から平安時代にかけての多数の大型掘立柱建物などを検出し、犬上郡に居住した豪族に関係するのではないかと推定される重要な遺跡であることが判明しました。遺構の大半は、関係者のご理解とご協力による設計変更を経て、地下に保存していただきました。

今回は、新たに事務棟建設に伴って昭和 58 年調査地の南東側において 2 箇所の発掘調査を実施するもので、南西側を第 1 調査区（1,656 m<sup>2</sup>）、北東側を第 2 調査区（1,104 m<sup>2</sup>）としています。

## 2. 第 1 調査区の発掘調査の成果（第 5 図）

### 1) 基本層序

厚さ 0.6～0.8m の盛土層と厚さ約 0.2～0.4m の旧水田の床土層を除去すると、黄灰色粘質土層が現れます。この黄灰色粘質土層の上面はほぼ平坦になっていますが、これは耕地整理の際に平坦な水田を作るために削られたためと考えられます。遺構は、おもに褐色系粘質土が埋まった状態で、黄灰色粘質土層上面で検出しました。検出高は標高 107.6m 前後です。

### 2) おもな遺構と遺物

**掘立柱建物 SB01**　掘立柱建物は、地面に直接穴を掘って柱を立てた建物です。調査区の南部で検出しました。桁行（けたゆき）3 間 × 梁行（はりゆき）3 間の建物で、6.1m × 4.5m の規模を持ち、柱間は桁行約 2.0m ・ 梁行約 1.5m を測ります。桁行の方位は南北から 38° 西に振ります。柱穴の平面形はほぼ隅丸方形を呈して、1 辺 0.6m 前後を測り、深さは 0.5～0.7m を測ります。いくつかの柱穴には、柱の抜き取り穴もみられます。このほか、東方向と北方向に直径約 0.3m の柱穴が 3 基ずつあり、この建物に付属する施設と考えられます。12 基の柱穴のうちの 2 基から須恵器の破片が出土していて、これらの遺物の年代から、奈良時代後半から平安時代前期にかけて（8 世紀後半～9 世紀前半）のものと考えられます。

**掘立柱建物 SB02**　調査区の南西壁際で検出しました。5 基の柱穴を確認しただけで、全体の規模は不明です。3 間分を確認した桁行は 6.1m、柱間は約 2.0m を測ります。桁行の方位は約 2.5m 離れた掘立柱建物 SB01 とほぼ同じですので、同時期に存在したと考えられます。ただし、梁行の柱間は桁行と同じ約 2.0m を測り、平面隅丸方形を呈する柱穴も 1 辺約 0.5m とやや小さくなるなど、異なる特徴も認められます。柱穴のうちの 1 基から土師器の破片が出土していますが、小片のため時期を決定するには至っていませんが、奈良時代後半から平安時代前期にかけての建物と考えられます。

これらのほか、掘立柱建物 SB01 周辺から多数の柱穴を検出しましたが、掘立柱建物 SB03 以外には、建物としてまとまるまでは確認できていません。また、柱穴 SP07 からは、土師器の長胴甕（ちょうどうがめ）が見つかっています。

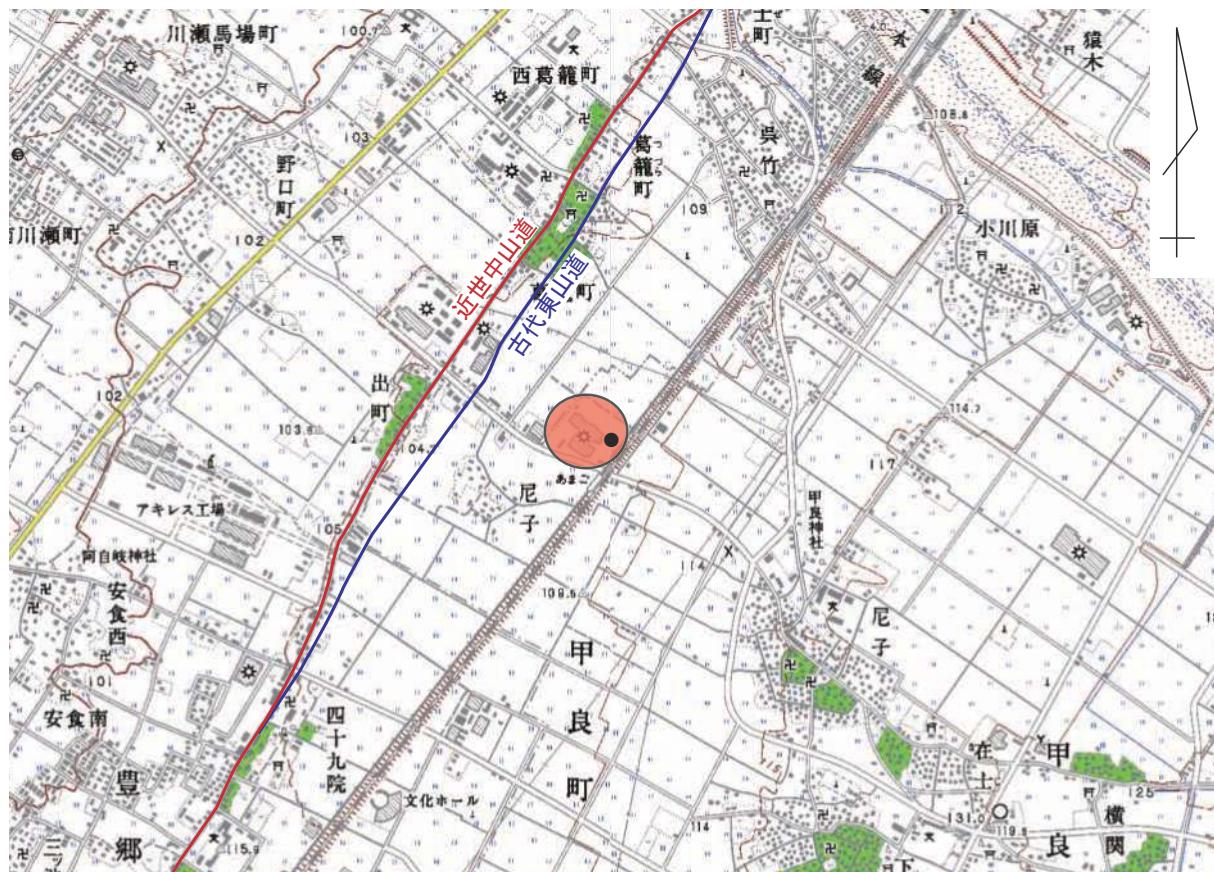


図1 長畠遺跡 位置図 (S=1:25,000)

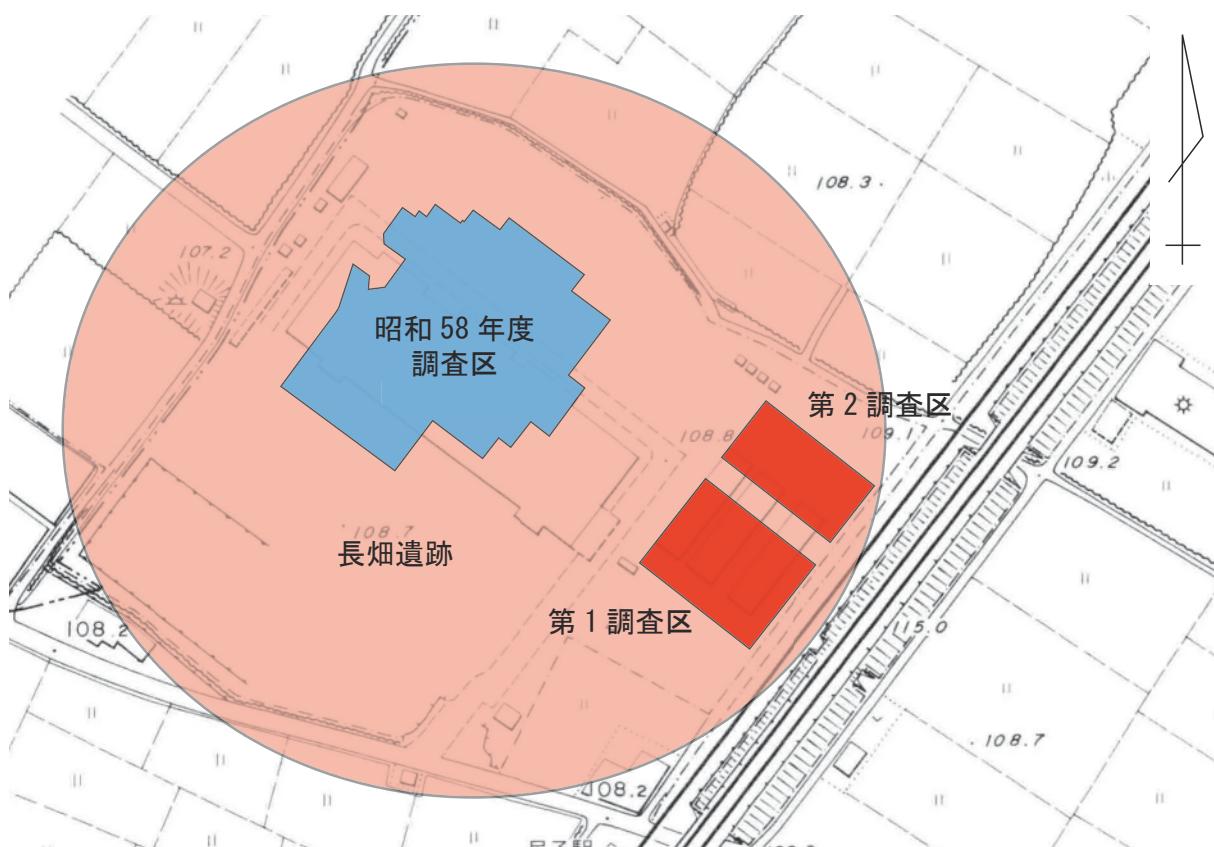


図2 長畠遺跡 調査区位置図 (S=1:2,500)

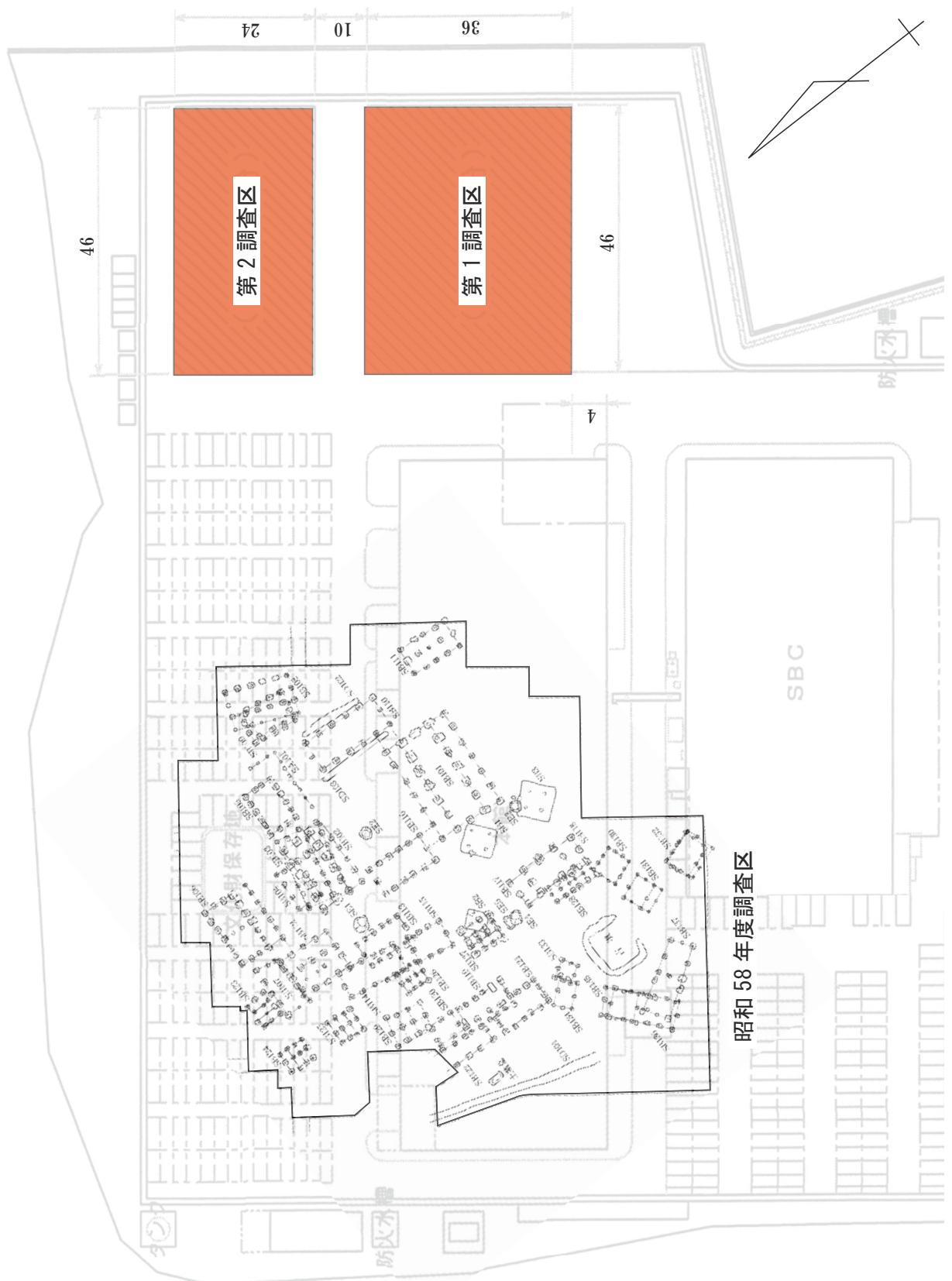


図3 長烟遺跡 調査区位置図 (S=1:1,000)

**竪穴住居 SH04** 竪穴住居は、地面を掘り下げる床とし、屋根をかぶせた住居で、縄文時代から存在します。調査区の南西部で検出しました。平面形は、およそ隅丸方形を呈して四隅をほぼ東西南北に向け、1辺3.5~4.0m・深さ約0.3mを測ります。竪穴住居の北東辺の東寄りの壁に粘土で造られたカマドが付けられています。そのほか、硬く叩き締められた床面には東隅に穴が1基掘り込まれていました。遺物にはカマドから出土した須恵器や土師器の甕の破片数点がありますが、これらの遺物の年代から、奈良時代前半(8世紀前半)に使われたと考えられます。

**溝 SD05** 調査区の北東壁際で検出しました。ほぼ弧を描くように屈曲していますが、両端部が調査区外に伸びていくため、全体の規模は不明です。検出したのは長さ約11m分で、幅約0.6m・深さ約0.15mを測ります。遺物が出土していないため、溝SD05が使われた時期は不明ですが、古墳の周溝となる可能性も考えられます。前回の調査でも、方墳の周濠1基が見つかっています。

**土坑 SE09** 調査区の南東壁際で検出しました。調査区外に広がるため、全体の規模は不明です。掘り込みは3段が認められ、最も深い箇所は深さ約0.9mを測ります。中から人頭大までの大きさの多数の礫とともに須恵器の壊(つき)や土師器の鍋などの土器が出土しました。これらの遺物の年代から、奈良時代後半(8世紀後半)に埋まつたと考えられます。

### 3. 第2調査区の発掘調査の成果(第4図)

#### 1) 基本層序

第1調査区と状況はほぼ同じですが、遺構を検出したのは、黄灰色粘質土層だけではなく、茶色粘質土層や褐色粘質土層など、様々な土層の上面です。標高は第1調査区よりもやや高い107.7m前後です。

#### 2) おもな遺構と遺物

**掘立柱建物 SB21** 調査区の中央部東寄りで検出しました。桁行4間×梁行3間の建物で、6.4m×4.5mの規模を持ち、柱間は桁行約1.6m・梁行約1.5mを測ります。桁行の方位は南北から23°西に振ることから、第1調査区で検出した掘立柱建物SB01や同SB02とは、建てられた時期が異なると考えられます。柱穴の平面形は隅丸方形を呈するものが多く、1辺0.5~0.8mを測り、深さは0.4~0.6mを測ります。いくつかの柱穴には、柱の抜き取り穴もみられます。14基の柱穴のうちの2基から土師器の破片が出土していますが、小片のため時期を比定できません。しかし、後述するように掘立柱建物SB22と桁行の方位がほぼ同じことから、同時期のものと考えられます。

**掘立柱建物 SB22** 調査区の中央部西寄りで検出しました。桁行3間×梁行3間の建物で、4.6m×3.9mの規模を持ち、柱間は桁行約1.5m・梁行約1.3mを測ります。ただし、柱穴の1つは近年の搅乱により壊されていました。桁行の方位は掘立柱建物SB21とほぼ同じですので、同時期に存在したと考えられます。柱穴の平面形は隅丸方形を呈するものが多く、1辺0.4~0.8mを測り、深さは0.3~0.6mを測ります。12基の柱穴のうちの3基から須恵器や土師器の破片が出土していて、これらの遺物の年代から、奈良時代後半から平安時代前期にかけて(8世紀後半~9世紀前半)のものと考えられます。

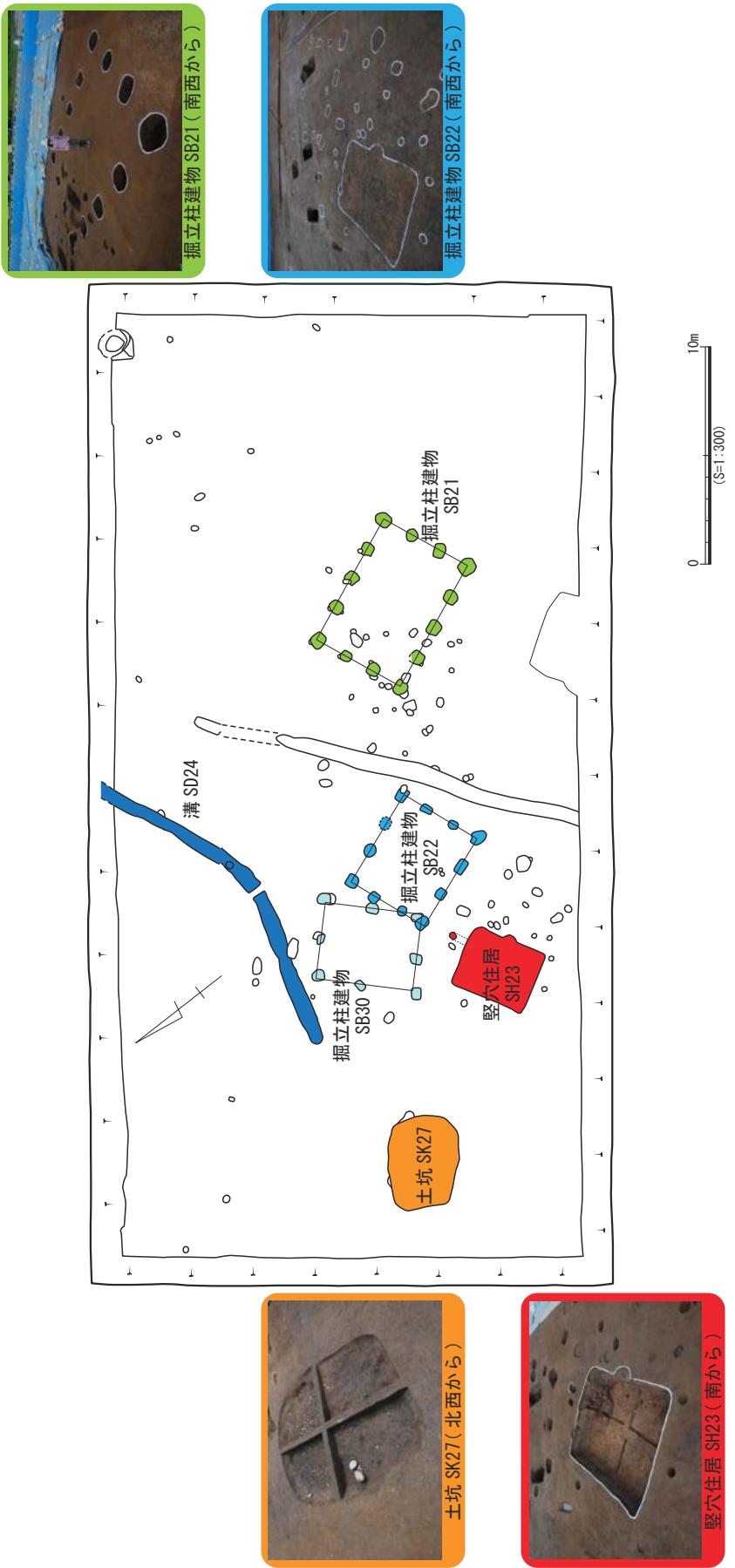
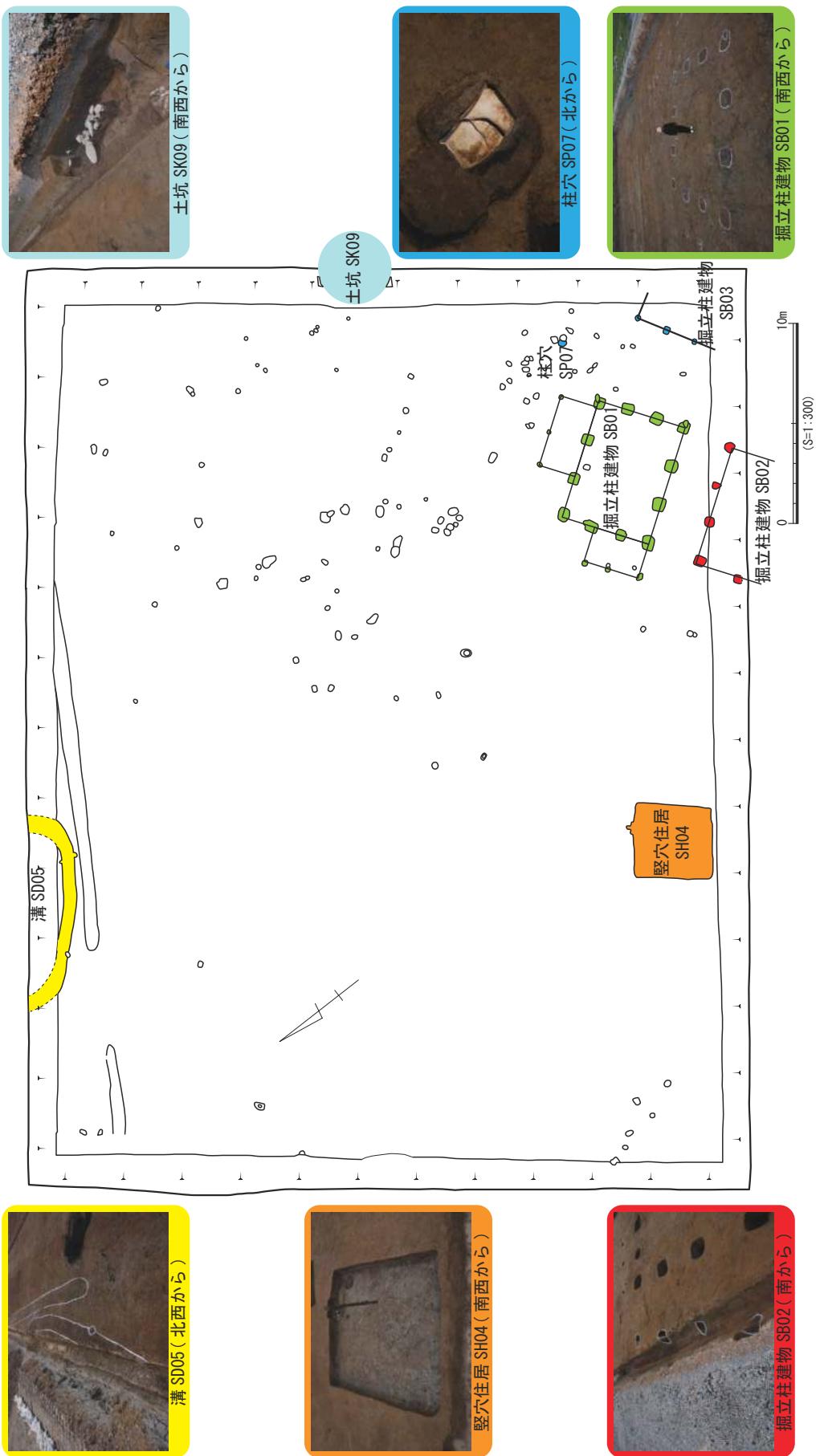


図4 長畠遺跡 第2調査区 遺構平面図

図5 長畑遺跡 第1調査区 遺構平面図



**掘立柱建物 SB30** 調査区の中央部西寄りで検出しました。桁行 2 間×梁行 2 間の建物で、4.5m × 3.6m の規模を持ち、柱間は桁行約 2.2m・梁行約 1.8m を測ります。桁行の方位は南北から 50° 東に振ります。2 基の柱穴が掘立柱建物 SB22 の柱穴に壊されているので、それに先行すると考えられます。柱穴の平面形は隅丸方形を呈するものが多く、1 辺 0.4~0.6m を測り、深さは 0.2~0.5m を測ります。8 基の柱穴のうちの 4 基から須恵器や土師器の破片が出土していて、これらの遺物の年代から、奈良時代後半から平安時代前期にかけて（8 世紀後半～9 世紀前半）のものと考えられます。

**竪穴住居 SH23** 調査区の南西部で検出しました。平面形は、おおよそ隅丸方形を呈して四隅をほぼ東西南北に向け、1 辺は 2.9m × 3.6m、深さ約 0.5m を測ります。北東辺の東寄りの壁に粘土で造られたカマドが付けられ、また、硬く叩き締められた床面の東隅に穴が 1 基掘り込まれています。これらは第 1 調査区で見つかった竪穴住居 SH04 と同じ特徴です。さらに、残存状態が非常に良好で、カマドから出た煙を外へ出すトンネル状の煙道が残っていました。このほか、南東辺にみられる半円形の窪みや、その下の床面の小規模な 2 基の柱穴は、床面に降りるための梯子を設置した痕跡である可能性があります。遺物には、埋まった土やカマド付近から出土した須恵器の坏身や土師器の碗・甕などがあります。これらの遺物の年代から、奈良時代前半（8 世紀前半）に使われたと考えられます。前回の調査と合わせ、竪穴住居は合計 5 棟となります。

**溝 SD24** 調査区の北部で検出しました。緩く屈曲しながら東から西へと流れています。約 16m 分を検出しましたが、東端は調査区外へ伸びています。西端は途切れていますが、これは耕地整理の時に一段低い水田が作られたためです。幅は 0.5~0.8m、深さ最大 0.15m を測ります。埋土は上下 2 層にわけられますが、上層は砂を多く含むことから、水の流れは速かったです。途切れた西端の延長上には後述の土坑 SK27 があるので、そこに水を引き込むための水路と考えられます。出土した遺物には須恵器の坏蓋などがあり、これらの遺物の年代から、奈良時代後半（8 世紀後半）に埋まったと考えられます。

**土坑 SK27** 調査区の西部で検出しました。平面形は楕円形に近い形状を呈し、長軸約 4.5m、短軸約 3.2m、深さ最大 0.25m を測ります。底面の中央部から東部にかけては、礫が多数敷かれていたので、池であった可能性があります。その水は、前述の溝 SD24 を通じて引き込まれていたと考えられます。出土した遺物には須恵器の坏身や土師器の甕などがあり、これらの遺物の年代から、奈良時代後半（8 世紀後半）に埋まったと考えられます。

#### 4. まとめ

今回の発掘調査で見つかった遺構は、いずれも奈良時代から平安時代前期にかけてのものです。これは、前回の調査とほぼ同じであり、長畠遺跡が東に拡がり、約 2 世紀にわたり人々が居住していたことが明らかとなりました。どのような人々が住んでいたのかは今後の課題ですが、旧東山道に近いことや建物がより広範囲に存在していることから、古代の湖東地域でかなり大きな力を持っていました豪族の存在が想定されます。

これから整理調査を進めていくなかで、さらに多くの成果を得られることと思います。今後も、文化財調査へのご理解・ご協力を賜りますよう、よろしくお願ひします。